

援助職のリカバリー

《1》

～どうして援助職を選んだの？～

袴田 洋子

援助職にもいろいろ

「リカバリー」という言葉を最近、意識するようになりました。野中猛先生の著書「図説 リカバリー -医療保健福祉のキーワード」には「それぞれの自己実現や生き方を、主体的に追求するプロセスのこと。支援の目標」と書かれています。

この言葉を目にした時、自分の中にとっても大きな「しっくり感」がありました。ああ、自分は援助職をしながら、クライアントの痛みを聴きながら、実践を通して自分自身がリカバリーしているのかな、と思ったからです。そしてそこには、嬉しい感情も混ざっていました。どうして嬉しいのか？ それは、私自身が恐ろしいほどのダメダメ援助職だったからです（もちろん今でも修行中）。

今回、このダメダメさを公式？に言語化し、私のような援助職がいることを知っていただければ、これから援助職を目指す方、あるいは目指したいけど、どうやら大変な仕事らしいので、こんな自分では勤まらないのではないかと不安を抱いている方や学生の方には、勇気を持って援助職の道にその一歩を踏み出していただけると確信いた

します（冗談ではありません）。

「援助職」の道への入り方は、多様に存在します。医療や福祉、教育などの専門教育を受けての新卒での就職や、あるいは一般企業等に勤めた後に、援助職を志しての再就職、あるいは志したわけではないけれど、偶然社内で配置されたら、予想外にやりがいを感じて改めて専門的に学んでみようと思った、あるいは少し時給がいいし、「資格」も取って子育ても一段落したからパートで始めてみた…などなど、本当に色々です。

手に職を持つ、のウラの理由

私の「ダメダメ援助職」の始まりは、看護師でした。看護師になるには、前述でいう看護の専門校を卒業しなければいけないので、当然、進学先自体を「看護学校」と定めることになります。

高校2年の3学期。高3の授業を選択すること、つまりは大まかな進路、理系か文系かを考える時期でした。当時17歳の私の考えは「仕事をするとしたら、利益とか売り上げとか、お金のこと（そういう事を考えるのは「欲」であり、あまり良い事では

ないっばいというなんとなくの無意識)を
考えるような仕事ではなく、人の役に立つ
仕事がいい。女医さんか? いや、自分
には医者になる頭はない。じゃ、看護婦だ。
きまりー」という論理で、高3の選択科目
を「生物」にして、看護婦になるための準
備に着手したのですが、実はもうひとつ、
看護婦を選ぶ大きな理由がありました。そ
れは「手に職を持たないと、自分は生きて
いけない」というものでした。

私には、小学校、中学校と仲良くしてい
た二人の友達、いわゆる幼なじみがいて、A
子とは高校も同じでした。私たち3人は昭
和42年生まれ、当時でも女子の四年制大卒
の就職率というのはあまりよくなく、氷河
期と言われていました。そして、当時の自
分はこんな考えでした。世の中、結局は学
歴社会。大卒でないと給料に差がつく。そ
んな差別を受けるのは絶対に嫌。でも英文
科とか文系の大学に行ったところで自分は
就職できるのか?(当時はあまり「社会福
祉」という分野が今ほどメジャーではなか
ったように思います。)この不安が自分には、
とても大きいのしかかりました。そして、
幼なじみのA子とB子。A子の父親は、慶
応卒の〇〇商社の重役、B子の父親は、東
大卒の〇〇製鉄の重役。彼女達は、「父親の
コネを使って就職なんて絶対に嫌」と今は
言っているけれど、選択肢として持っている。
文系の四大に進学しても父親のコネで
彼女たちはきっと就職できる(実際にした)。
でもうちの父親は工務店に勤める大工職人。
私には就職できるコネがない。小中高と同
じように生活してきたのに。何も変わらな
いと思っていたのに(不公平だ)。だから、
自分は手に職を持つしかない。

自分ではどうしようもできない事柄に、世
の中の不平等さを呪って、怒りとあきらめ
の感情を織り交ぜながら選んだ進路が「看
護婦」なのでした。

大卒ナースでなくチャイヤ

そうして、まずは「看護婦」を選んだわ
けですが、その看護婦になる、なり方。私
の場合は高卒後の看護婦ということで、正
看護婦になるパターンになりますが、それ
には、3年制の専門学校、3年制の短大、4
年制の大学、と3通りあり、当時は看護婦
の世界でももれなく「学歴社会」になって
いました(今は違うかもですが)。私が勤務
した大学病院では初任給で大卒とその他で
は1万円の差がありました。

当然、その当時の自分は、「同じ看護婦の
仕事をするのに、同じ国家試験に合格して
いるのに、卒業した学校が違うだけで差別
されるのは我慢できない」という怒りの論
理で、何とか看護大学に行きたいと考えま
した。しかし、そうそう、自分の学力と希
望が思い通りに絡まるわけではありません。
専門学校と、看護短大と、4年生の看護大
学を受験したのですが、短大は惜しくも補
欠合格、専門学校は合格、残るは大学の合
格発表を待つ事態となりました。

ここでまたひとつの「選択」がありまし
た。大学の合格発表の前に、専門学校の入
学金を払い込まねばならなかったのです。
私はほとんど迷うことなく、「(専門学校の
入学金を)払わなくていいから」と母親に
告げました。大学に落ちたら浪人になる場
面なのに、です。

大学に入って「看護理論をしっかり学び
たい」などと考えているわけでもなく、あ

くまでも、学歴というハシゴの上になりたいという思いで、専門学校卒のナースとしての自分は受け入れられませんでした。

幸い、新設の看護大学に合格することができて浪人にはならず済んだのですが、こうやって当時の「選択」を文字に書き起こしてみると、「ハシゴの上になれる自分」という基準で選択し、生きてきたんだなあとしみじみ思います。それは、言い換えれば、「物事をすべて勝ち負けでとらえている生き方・価値観」ということです。

身に付いた生きる術

あの人と比べて〇〇だから、自分がマシだろうとか、あれと比べたら、〇〇だから自分が優れているだろう、といった具合に、無意識のうちに自分の中で、色々なカテゴリーの「ハシゴ」が出現します。出現するまでならいいかもしれませんが。というか、誰の心の中にも、このハシゴは出現するかもしれません。自分と比べて、美人かそうでないか、優秀かそうでないか、収入は、学歴は、スタイルは、資格は、キャリアは・・・と、世の中は数多くのハシゴであふれていますが、そのすべてのハシゴの上にいることなどできるはずなのに、相手と瞬時に自分の立ち位置を比べる生き方は、幸せではないだろうと思います。何より、周りからどう評価されるのか、自分の中の基準ではなく、世の中にある基準だけを軸にして生きているということは、自分が自分の人生の主役になっていないということだと思います。

でも、そんな勝ち負けや、他者評価にすがって生きてきた、それが私の生きる術であり、身に付いてしまったものでした。こ

の「生きる術」がどうやって身に付いてしまったのか、その理由（不健全さ）がわかるのは、援助職を始めてから10年以上、後のこととなります。

運良く？看護大学に入った私は、いよいよ自身の不健全さを持って余し、人間関係で失敗を繰り返していきますが（今ももがいてあがいていますが）、こうやって、自分の身に起きた出来事を振り返り、自身で意味付けすることは、援助職に必要な自己理解ということなのだろうと思っています。そして、この自己理解の作業は、援助理論の教科書にあるいわゆる「他者理解」につながっていくと思います。それは、「自分もこうだったから、こうしたらいいよね」というものではなく、「失敗をした時の、上手くいかなかった時のあのみじめさ、悔しさ、怒り、悲しさ。そんな事があるとそう感じるもんだよね」という、クライアントへの共感につながるのだろうと思います。

なので、過去のダメダメさは、全く無駄にはならない、と思うわけなのです（自己満足でしょうか）（笑）。というより、そう思わなければやっていられないほど、ダメダメ援助職だったのです。この原稿を書いていると、過去のクライアントたちへの懺悔の気持ちがじわじわと広がってきて、ああ、やはり振り返りは大切なのだなあとも思います。

今回は、大学生と看護師時代のダメダメぶりを振り返ってみたいと思います。